



子どもの姿に学ぶ

校長 松崎 由里子

体育館わきのハナミズキの白く美しい花が、初夏の光にまぶしく輝いています。昨年度は一斉休校中だった4・5月のことを思うにつけ、毎朝子どもが登校してくる、それだけで大きな喜びを感じます。相変わらずマスクが手放せず、給食中のおしゃべりもできず、感染症対策を講じながらの日々ではありますが、それでも、学年ごとにリレーしての「1年生を迎える会」や、3交代の授業参観など、できることに取り組みながら、子どものきらきらした瞳と笑顔に支えられ、令和3年度がスタートして1か月が過ぎました。



正門で子どもを迎えていると、4月から突然、これまで一緒だった保護者の姿がなく、一人で登校できるようになった子がいました。「2年生になったから、ひとりで行けるよ。」と、決意を新たに、朝の支度も素早くできるようになったのだそうです。5・6年生は、委員会活動が始まりました。「飼育小屋の鍵を借りに来ました。」職員室に来る5年生の子は、いつも元気いっぱい。感想を聞くと、「ウサギがとてもかわいいです。」と、くしゃくしゃの笑顔で答えてくれました。仕事を任せられる喜びでいっぱいということが伝わります。学年の節目は、それだけで子どもの心を大きく成長させています。

またある時は、校庭に面した花壇のカラスノエンドウが、小さな実をつけていることを見つけた子どもがいました。さやえんどうを小さくしたような実を、夢中になって集めています。活動を通してマメ科の植物の特徴に気付いているのです。「ミニ公園の池でアメンボを見つけた!」「テントウムシの幼虫がいたよ!」と、嬉しそうに報告する子どもの姿もあります。様々な生き物が活発に成長を、活動を始めるこの時期だからこそその学びがあるということを感じました。



子どもは、興味関心を高めると、ものすごい集中力と豊かな感性でかかわりを深めていきます。時にそれは大人の知識をはるかに越えることがあります。子どもの興味関心がどこにあるのかを見極め、学びに結び付けること、「子どもの心に火をつける」ことが、私たち教職員の役割だと考えています。子どもの姿に学ぶことを忘れず、日々の教育活動に取り組んでいきます。